ICOT Technical Report: TR-576

TR-576

「が」と「は」の語用論的機能について

野山　直彦，鈴木　浩之（松下）

August, 1990

© 1990, ICOT

ICOT

Mita Kokusai Bldg. 21F
4-28 Mita 1-Chome
Minato-ku Tokyo 108 Japan

(03)3456-3191～5
Telex ICOT J32964

Institute for New Generation Computer Technology

「が」と「は」の語用論的機能について

On the pragmatic functions of *Ga* and *Wa*

野口 直彦　　鈴木 浩之
Naohiko Noguchi　Hiroyuki Suzuki

松下電器産業株式会社情報通信東京研究所
Tokyo Information and Communications Research Laboratory,
Matsushita Electric Industrial Co.,Ltd.

概要

伝統的に「が」には叙述・総記、「は」には主題・対照という用法があると言われてきたが、このような用法の分類は、「が」と「は」の持つ語用論的機能の分類とは対応しない。そもそも用法とは聴者の解釈過程の違いによって説明されるべきものであり、表現形式が固有に持つ機能は、それとは独立に説明されるべきである。

本稿では、「が」と「は」の持つ一次的な語用論的機能は、それぞれ、文脈に対して新情報の構成要素であることを示す、文脈中から要素を抜き出して示す、ということのみであるという仮設を提案し、それに基づいて、上記のような用法が、聴者のより一般的な解釈過程のタイプとして説明できることを示す。

1　はじめに

いわゆる格助詞である「が」と「は」を含む文に関する、構文論的・意味論的・語用論的な分析は、日本語に関する研究のうちの主要なものの一つであり、現在までに多くの研究が行なわれてきた。

その中でも、久野 [5] は、「が」と「は」の意味・用法を分析し、その用法について以下のように分類している。

- 「が」：叙述・総記・目的格
- 「は」：主題・対照

そして、これらの各用法について、どのような構文的条件が課せられるかということを明らかにしている。さらに、「が」を含む文が発せられる文脈とのかかわりから、

主文の主語に現れる「が」は新情報を表す

という分析をも行なっている。

しかしながら、用法とは、実際に言葉が発せられた文脈およびその時の聴者の解釈過程（認識過程）に依存するものであり、上のような「が」「は」の用法の分類は、「が」「は」を用いたことだけによる本質的な分類であるとは言えない。つまり、上記のような分類は、「が」「は」の持つ用法としての分類ではなく、それらを用いた文の発話が引き起こす、聴者におけるある解釈過程のタイプの分類と見るべきである。つまり、用法を規定するのは、聴者の解釈過程のタイプであり、それは、ある言葉の発声と、その時の文脈によって引き起こされると考えるべきである。

本稿では、このような立場に立ち、久野の分析における、

「が」の総記用法
「は」の対照用法

を特に問題にし、

(a) 「が」「は」が総記用法・対照用法を持つのではなく、聴者の総記解釈・対照解釈がそれらを説明するのである。

(b) そのような総記解釈・対照解釈を生み出すのは、Grice の会話の公準に従うことに対応した、特殊化された会話の含意を導くような一般的な聴者の解釈過程である。（それらは「が」「は」を用いることとは独立である）

(c) 「が」「は」の持つ一次的な語用論的機能は、それぞれ、文脈に対して新情報の構成要素であることを示す、文脈中から要素を抜き出して示すということのみである。

(d) そのような「が」「は」の機能が、上記の一般的な解釈過程を引き起こすトリガーとなりうる。

(e) 久野による「が」「は」の用法の分類は、以上のような一次的な語用論的機能と、聴者の一般的な解釈過程により再構成される。

ということを主張する。

以下、2で問題点を明確にし、3で、Grice 流の規則からある種の会話の含意の一般的形式が導かれることを Levinson [7] に従って説明し、それがいわゆる総記解釈・対照

解釈にも適用可能であることを示す。さらに4で、「が」「は」の一次的な語用論的機能の提案を行なって、それと前節の一般的形式によって、文脈と聴者の解釈過程を通じて総記解釈・対照解釈が導かれることを説明する。

そして5にて関連する研究との比較検討を行ない、6にて結論を述べる。

2 問題提起

久野[5]によれば、「が」「は」のそれぞれの用法に関しては、次のような（構文的・意味的）制約がある。

- 「が」
  - 叙述用法：動作・存在・一時的状態の述語をとる

    総記用法：制限なし
- 「は」
  - 主題用法：総称名詞か文脈指示の名詞に付属する
  - 対照用法：制限なし

この制限に基づくと、次のような事実が帰結する。

- 総称名詞でも文脈指示の名詞でもない名詞（句）に付いた「は」は、必然的に対照用法である。
- 動作・存在・一時的状態でない述語をとった「名詞（句）＋が」は、必然的に総記用法である。

しかし、ある言語の使用がある用法であった、ということは、その言語使用の文脈と聴者の解釈過程があって初めて言明し得ることである。即ち、言語の用法とは、言わば聴者の解釈結果による分類であって、話者のなす行為の分類ではない。

つまり、「が」「は」を上のような制限のもとに使用した事実が直ぐにその用法を規定する訳ではない。従って、上記のように、ある言語形式の使用が必然的にある用法になるという定式化は、誤りであるように思われる。

用法とは、聴者の解釈過程の特徴によって分類されるべきであり、そのためには、ある言語表現が発せられたことによる聴者の解釈過程への影響としての語用論的な機能は何か、ということと、聴者の解釈過程の特徴はどのようなものか、ということとに分離して分析する必要がある。

この考えを基に、日常的に我々が行なっている対話を観察してみると、次のようなことが言える。

(a) 総記用法は「が」の使用に付随し、対照用法は「は」の使用に付随するかのように説明されてきたが、実際の言葉使いを観察すると、そうではない。つまり、総記解釈・対照解釈は、文脈によりどんな表現に対しても生じ得る。

(b) 「が」「は」を総記・対照用法に用いる時は、他の助詞を用いる時と同様に、そこに強勢が置かれるのが普通であるように思われる。

例えば、話者が昨日太郎、次郎、三郎と会ったという話をしている時に、

(1) 書類は太郎さんに渡しました

という発話を聞いた時に、話者は次郎でも三郎でもなく、太郎に書類を渡した、と総記的に解釈することは自然である。

また、映画を見に行こうか、演劇を見に行こうか、という相談をしている時に、

(2) 僕は映画を見たい

という発話を聞いた場合、話者は演劇は見たくないのだな、と対照的に解釈することも当然あり得る。

さらに、このような場合、

書類は太郎さん<u>に</u>渡しました
僕は映画<u>を</u>見たい

という具合に、下線の部分（総記的・対照的に解釈される部分）に強勢を置いて発話するのが普通である。これは、「が」「は」を用いた時も同様で、太郎だけが賢い、という総記用法で話す時には、

(3) 太郎<u>が</u>賢い

という発話（「が」に強勢をおいた発話）になるのが普通であるし、また、あいつは頭はいいけれども融通はきかない、という意味で次のような発話を行なう時には、

(4) 頭<u>は</u>いいんだけどね

という発話（「は」に強勢をおいた発話）になるのが普通だろう。

このように、必ずしも、「が」「は」を用いることが総記・対照解釈をもたらすものでもなく、またそのような解釈をもたらすのは、ある種の文脈であったり、他の要因（強勢や身振りなどのパラ言語的な要因）であったりすることもある。以上の事実は、「が」「は」が総記・対照用法を持つということの反例にはならないが、少なくとも、次のような予測を可能にするだろう。

1. 総記・対照解釈をもたらすのは、「が」「は」の使用にその源があるのではなく、ある特定の文脈と聴者のある特定のタイプの認識過程である。
2. 従って、「が」「は」の使用が聴者の認識過程に及ぼす影響は、直接的に総記・対照解釈をもたらすということではなく、むしろ間接的に、上のような特定のタイプの聴者の解釈過程を引き起こすものと考えられる。

次節以降は、この予測を正当化するための議論を行なう。

3 総記・対照解釈のメカニズム

本節では、前節での予測に基づき、総記・対照解釈をもたらす聴者の認識過程は一般的にはどんなものか、ということを考える。直観的には、総記解釈・対照解釈は、「必要十分な情報の呈示」という Grice の量の第1公準に従うということによる一般的な解釈過程によって規定できると考えられる。

ここでは、一般的な会話の含意を、Grice の公準に従うことによる聴者の認識過程の特徴により説明しようとする Levinson [7] の説を紹介し、「が」「は」に関わる総記解釈・対照解釈は、それを特殊化された会話の含意のレベルまで拡張した認識過程で説明されることを示す。

3.1 一般的な会話の含意

発話は、その字義的な意味だけではなく、まさしく発話されたということによって、それ以外の意味（含意）をも持つ。「が」や「は」の使用による、総記的な解釈、対照的な解釈も、そのような含意の一つであると考えることができる。そのような含意がどのように規定されるか、ということについては、所謂前提 (presupposition)、会話の含意 (conversational implicature)、間接的発話行為 (indirect speech act) などの研究において話題にされてきた [12]。そのような含意は、発話の表現として現れてない以上、当然聴者の解釈過程にかかわることになり、どのような含意がどのような解釈過程によってもたらされるか、といった研究も行なわれきている。

中でも Grice は、言外の意味を、慣習的含意 (conventional implicature)、一般的な会話の含意 (generalized conversational implicature)、特殊化された会話の含意 (particularized conversational implicature) とに分類し[1]、特に会話の含意を生じさせる前提条件として、協調的な会話の原則 (cooperative principle) と、その下位規則である会話の公準 (conversational maxims) とを提案している [1]。Grice の枠組では、話者が、それらの公準に意図的に違反することによって、聴者に対してある種の含意が存在することを示すことが可能になる。

しかし、Grice の規則は、それを破ることによって含意を生じさせる他にも、それを守るということによって、ある種の含意をも生じさせ得る。Levinson[7] は、Grice の分類による一般的会話の含意 (generalized conversational implicature) の概念を擁護し、そのレベルの含意は、Grice の規則を遵守するということに対応した、聴者が解釈を行なう際の heuristics として規定できるとして、次のようなものを提案している。（ここでは、語用論的に含意される、という関係を $\rightarrow^c$ で表す）

Q-heuristic(量の第1公準に基づく)

「述べられなかったことはそうでない」ということ。これは、informativeness の異なる言語表現の顕著な対照 (salient alternate) に基づいて含意が導かれる。

(5) Some of the boys came.
$\rightarrow^c$ Not all boys came.

(6) John tried to reach the summing.
$\rightarrow^c$ He didn't succeed.

上の例では、some と all、try と succeed という言語表現上の顕著な対照が存在し、all ならば some、succeed ならば try という論理的な関係が成立している。

I-heuristic(量の第2公準に基づく)

「単純に表現されたことは、典型的に例示するものである」ということ。極小の特定化が、極大の情報量を持つ解釈か典型的な解釈を導く、という原理に基づいて含意が導かれる。

(7) John's book is good.
$\rightarrow^c$ the one he read,wrote,borrowd, as appropriate.

(8) a road $\rightarrow^c$ hard-surfaced one

M-heuristic(様態の公準に基づく)

「異常な表現で言われたことは、正常ではない」ということ。有標の (marked) 表現は典型的な解釈を妨げ、普通でない状況を含意する。

(9) Bill stopped the car.
$\rightarrow^c$ in the stereotypical manner with the foot pedal

(10) Bill caused the car to stop.
$\rightarrow^c$ not in the normal way, e.g. by use of the emergency break

これらの内で、Q-heuristic は、「必要十分な情報の呈示」という量の第1公準を守ることを前提とし、ある言語的に顕著な対照の存在に基づいて駆動されるものである。要するに、「S ならば W である」が成立するようなある言語表現上の顕著な対照 $\langle S, W \rangle$ に対して（「S の方が W より強い」というスケールをいれて考える）、「W と述べた」及び「W と言うからには S でない」ということに基づいて「S でない」ということを含意として導く解釈過程である。

この場合、「S ならば W である」という関係が論理的な関係ならば、W であるということが、呈示可能なもののうち必要十分な情報であるための条件として、当然 S でないことが導ける[2]。Q-heuristic は、この関係を、論理的な関係だけでなく、「言語表現上の顕著な対照関係」とい

[1] これらの含意のうち、慣習的含意とは、特殊な状況とは独立に、個別の単語を言語習慣的に特徴づけるものであり、却下不可能なものである。一般的な会話の含意は、特殊な状況設定からは独立であるが、その含意が却下可能なものである。また、特殊化された会話の含意とは、特殊な状況設定によって導かれるものである。

[2] S であるとすれば S であると述べる方が情報量が多いことになるから。

うことまで拡張したものと考えることができる。

ここでは、この Q-heuristic を、後の議論のために多少形式化する。議論を簡単にするために、会話において、話者は、発話を行なうことによってある情報 ψ を聴者に呈示し（ある情報 ψ を述べ）、聴者はその発話を観察することによってその提示された情報 ψ を認識すると共に、その含意 ϕ を解釈過程を通じて導くものと捉えよう[3]。

そして、話者が呈示し、聴者が認識・解釈する情報は、全て、

(11) $P'(\vec{a}')$

という形式を持つものとする。これは、ある対象たち（$\vec{a}'$）がある関係（P'）にある、ということを表すものである。そして、言語表現のうち、いわゆる述語 P はある関係 P' を直接表し、いわゆる名詞（句）a_i は一つの対象 a_i' を直接表すと考える。

今、話者がある発話を行なって情報 ψ を呈示し、それを聴者が観察して情報 ϕ を含意として解釈する、ということを次のように表現することにしよう。

(12) $\dfrac{utter\ \psi}{\phi}$

Q-heuristic は、言語表現上の顕著な対照の存在に基づいていたが、発話された言語表現のうち、述語に関して、そのような対照 $\langle P, Q\rangle$（P の方が Q より強い）が存在する場合の Q-heuristic は、次のように表せる。（P,Q はそれぞれ関係 P',Q' を表現しているものとする）

(13) $\dfrac{utter\ Q'(\vec{a}')}{\neg P'(\vec{a}')}\langle P, Q\rangle$

これは、$\langle P, Q\rangle$ なる言語表現上の対照関係に基づいて、$utter\ Q'(\vec{a})$ から $\neg P'(\vec{a})$ を導く、という解釈過程を表現するものである。

例えば (6) では、⟨ Succeed,Try ⟩が顕著な対照をなすということに基づいて、次のような形式で含意が導かれる。

(14) $\dfrac{utter\ Try'(john', \psi)}{\neg Succeed'(john', \psi)}$ ⟨ Succeed, Try ⟩

また、発話された言語表現中の、名詞（句）に関して顕著な対照 $\langle a_i, b_i\rangle$（a_i の方が b_i より強いとする）が存在する場合の Q-heuristic は、同様に次のように表せる。（a_i,b_i はそれぞれ a_i',b_i' を表現しているものとする）

(15) $\dfrac{utter\ P'(a_1', \ldots, b_i', \ldots)}{\neg P'(a_1', \ldots, a_i', \ldots)}\langle a_i, b_i\rangle$

(5) の例では、⟨ all,some ⟩が顕著な対照をなしており、次のようにして含意が導かれる。

(16) $\dfrac{utter\ Come'(some_of_the_boys')}{\neg Come(all_of_the_boys')}$ ⟨ all, some ⟩

[3] いわゆる字義的な意味が ψ に対応し、含意が ϕ に対応する。

このように、言語表現上の対照関係に基づいた含意は、聴者の、文脈に依存しない解釈形式によって規定することができる。

3.2 特殊化された会話の含意としての総記解釈・対照解釈

前節の Q-heuristic は、一般化された会話の含意を説明するための道具立てであったので、言語表現上の顕著な対照の存在が必要であった。一方、日本語における「が」「は」の使用に伴う総記解釈・対照解釈は、そのような言語表現上の対照を必要としない。総記解釈・対照解釈が行なわれる場合は、発話の文脈が対照物を供給する。

従って、「が」「は」の使用に伴った総記解釈・対照解釈は一般的な会話の含意ではなく、ある種の文脈を必要とした、特定化された会話の含意のレベルの現象であると考えることができる。本節では、前節で形式化した Q-heuristic を、特殊化された会話の含意に拡張し、日本語での「が」「は」の使用に伴った総記解釈・対照解釈に適用することを考えよう。

最初に、日本語における、「a_1 は P_1 だ」「a_1 が P_1 だ」という発話を考えよう。この発話が呈示する（字義的な）情報は、前節の定式化に従って、

(17) $P_1'(a_1')$

と表される。

そして、この発話が行われた時の聴者の持っている環境 C というものを考え、その環境中に、上の情報と何らかの意味で対照をなす次のような対象が存在したと仮定し、

P_1' に対して ： $P_2', \ldots, P_n'$
a_1' に対して ： $a_2', \ldots, a_m'$

その事実を、

(18) $C \vdash P_1', \ldots, P_n', a_1', \ldots, a_m'$

のように表すものとする。

すると、発話が行われる時に、話者によって呈示され得る情報としては、実際に呈示された $P_1'(a_1')$ をも合わせて、$P_i'(a_j')$, $i = 1, \ldots, n; j = 1, \ldots, m$ で表される、nm 個の情報があることになる。

今、そのような環境下において、実際には $P_1'(a_1')$ だけを述べたということが観察された訳であるから、その情報が聴者の持っている環境に照らして必要十分な情報であるためには、$P_1'(a_1')$ 以外の情報は全て排除されなければならない。

即ち、次のような形式の解釈より、$P_1'(a_1')$ の C に対する必要十分性が満たされる。

(19) $\dfrac{C \vdash P_1', \ldots, P_n', a_1', \ldots, a_m' \qquad utter\ P_1'(a_1')}{\neg P_1'(a_2') \wedge \ldots \wedge \neg P_n'(a_m')}$

これは、ある発話に関して聴者が持っている環境と、その発話が呈示する情報から、聴者が総記的解釈を導く一般的な認識過程の定式化であるとみなすことができる。つまり、総記解釈は、Grice の量の第1公準を守るということに基づいた、特殊化された会話の含意を導くための一般的な解釈過程であるとみることができよう。

例えば、太郎、次郎、三郎に関して話をしている時に、話者が

(3) 太郎が賢い

という発話を行なったとしてみよう。この場合は、上の一般的形式に従った、次のような過程によって総記解釈が導かれることになる。

$$(20)\quad \frac{C \vdash taro', jiro', saburou' \qquad utter\ Wise'(taro')}{\neg Wise'(jiro') \wedge \neg Wise'(saburou')}$$

また、同様な環境において、発話の呈示する情報は、単にそれだけでは、他の全ての可能性を否定するものではない。しかし、今そのような環境で話者がわざわざその情報だけを述べたということに何らかの意義を見出すためには、他の何らかの可能性を排除する必要がある。このことは、その発話に関する次のような対照解釈を導く。

$$(21)\quad \frac{C \vdash P'_1, \ldots, P'_n, a'_1, \ldots, a'_m \qquad utter\ P'_i(a'_1)}{\neg P'_i(a'_j)}$$

即ち、対照解釈は、先ほどの総記解釈がおこなわれたのと同様な環境において、ある発話が呈示する情報が有意義であるための必要性に基づいて導かれる一般的な解釈過程である。

要するに、総記解釈・対照解釈は、特殊化された会話の含意に関して、拡張された Q-heuristic に従った聴者の解釈過程によってもたらされると考えることができる。

ここまでは、簡単のために「a_1 が P_1 だ」「a_1 は P_1 だ」という発話をとりあげて考えたが、総記解釈・対照解釈に関する以上の形式化は、2にも述べたように、「が」「は」の使用に勿論依存しない。

例えば、2の例 (1) の場合には、

(1) 書類は太郎さんに渡しました

次のように、上と全く同じ形式により総記解釈が導かれる。

$$(22)\quad \frac{C \vdash taro', jiro', saburou' \qquad utter\ Send'(sp', taro')}{\neg Send'(sp', jiro') \wedge \neg Send'(sp', saburou')}$$

また、例 (2) の場合には、

(2) 僕は映画を見たい

次のようにして対照解釈が導かれる。

$$(23)\quad \frac{C \vdash See', movie', act' \qquad utter\ See'(sp', movie')}{\neg See'(sp', act')}$$

つまり、本節で述べてきた、総記解釈・対照解釈の形式は、どのような言語表現を用いたかということには依存しない、聴者の解釈過程の一般的特徴を規定するものである。

4 「が」・「は」の語用論的機能

前節までに、総記解釈・対照解釈は、「が」「は」の使用とは関係なく、特殊化された会話の含意を導くというレベルの、聴者の一般的な解釈過程によって説明されるということを示した。

では、「が」「は」の持つ語用論的機能（即ち、聴者の解釈過程に与える影響）はいかなるものであろうか？久野の分析によれば、次の例は、総記用法・対照用法しか持たない例である。

(3) 太郎が賢い

(24) 雨は降っている

我々はこれらを、そのような用法を持つものではないとし、それらは聴者の解釈過程に依存するものであると考えた。これらは、適当な文脈（聴者の環境）があれば、正しく総記解釈・対照解釈を行なえる。しかし、これらの発話をそのような適当な文脈なしに聞いた場合にも、聴者が普通に総記解釈・対照解釈を行なうだろうということは、直観的には正しそうである。つまり、これらの発話は、聴者に対して、一般的な総記解釈・対照解釈の過程を引き起こさせる仕組みを持っているように思われる。

前節における形式化では、話者が呈示した情報と、なんらかの意味で対照をなす対象が文脈に存在することが前提されている。つまり、そのような文脈（聴者の解釈する環境）があれば、「が」「は」の使用とは関係なく、総記解釈・対照解釈を起動することができる訳である。（実際に起動するかどうかは、聴者の裁量にまかされている）

しかるに、聴者がそのような環境を持っていない時に、上のような発話を聞いて総記解釈・対照解釈を行なう場合には、逆にその解釈を行なえるような文脈を自ら構成しなくてはならない。従って、上のような発話がそのまま総記解釈・対照解釈を引き起こす、という事実は、それらの発話が、総記解釈・対照解釈を可能にするような文脈を聴者に構成させるという機能を持っているということになる。

つまり、「が」「は」の使用は、発話によって呈示される情報と何らかの意味で対照をなす対象を、文脈中に生じさせる効果がある、ということになる。

そこで、「が」「は」の、文脈に対する機能的関連を述べている、久野の次の分析を思い出そう。

「が」の機能：

主文の主語に現れる「が」は、名詞句がその文の中で、新しいインフォメーションを表すことをマークする標識である。

「は」の機能：

文脈中からある対象を抜き出して示す（主題の「は」の機能）。

ここでは、これらの機能が、「が」「は」の持つ一次的な機能であると仮定し、その機能に従って、どのようにし

て総記解釈・対照解釈の文脈を構成することになるか、ということを考えてみよう。

4.1 「が」の機能

まず、「が」の場合であるが、その機能を明確にするためには、まず、

「新しいインフォメーション」

とはどのような情報のことを言うのか、ということを考える必要がある。

久野は、文脈に対して「新しい」ということと、「文脈に登場していない」という概念は違うものであることを示すと同時に、「新しい情報」を、「文脈から予測することのできない情報」という概念で捉えようとしている。そして、

(25) 太郎が東京に来た

(26) 僕が東京に来た

という発話を比較し、(26) が総記の解釈しか受け得ないのは、話し手の出現に関わる情報は、文脈から予測することのできない情報にはなり得ないことによる、という説明を行なっている。即ち、ある発話が呈示する情報にも、「文脈からの予測のし易さ」という測度に関して分布があり、その分布に従って、聴者の解釈が影響を受けるということになる。つまり、発話により呈示される情報 $P'(a')$ が、聴者がその時の環境から予測できないものであった場合には、そのことによって、「が」の機能は果たされる。従って、聴者は、情報 $P'(a')$ を認識する、という段階までで発話の解釈を停止して構わない。

しかし、発話によって呈示される情報が、聴者の環境から予測可能、あるいは常識的に予測可能なものであった場合には、「が」の機能を働かしめるために、何らかの余分な解釈過程を起動する必要が生じる。つまり、呈示された情報が、何らかの意味で新しい情報（予測できなかった情報）となり得るような文脈を構成する、という必要性が生じる。

そして、その新たに構成された文脈の中で、再び解釈を行なうことによって、総記解釈が導かれる、と考えることができる。

以上の過程は、次のように記述できよう。（「ａがＰだ」の発話を考えよう）

1. 「が」の使用は、それが付随した名詞句が表す要素 a' が、文脈（聴者の環境）に対して新しい情報（予測できない情報）の構成要素となることを示す。

2. 聴者の文脈に対して、発話により呈示された情報 $P'(a')$ が新しければ、「が」はその機能を果たし、解釈過程を停止してよい。（叙述用法としての解釈）

3. 聴者の文脈に対して、発話により呈示された情報 $P'(a')$ が新しくない場合には、「が」の機能を完結させるために、適当な文脈を構成する。その際に、新情報として特にマークされている a' に関して対照をなすような要素が（普通は）導入される。

4. 新たに構成された文脈に基づいて、一般的な総記解釈が行なわれる。（総記用法としての解釈）

以上の解釈過程は、次のような図式で表すこともできよう。

$$
(27)\quad
\begin{array}{cl}
utter\ P'_1(a'_1) & ① \\
\hline
P'_1(a'_1) & ② \\
\hline
C \vdash P'_1, a_1, \ldots, a'_m & ③ \\
\hline
\neg P'_1(a'_2) \wedge \ldots \wedge \neg P'_1(a'_m) & ④
\end{array}
$$

これらは、

① ：発話の観察

② ：発話が呈示する情報の認識（「が」の使用による、新しい情報であることのチェック）

③ ：新しい情報であるための文脈の構成

④ ：総記解釈

という過程を表すものである。

4.2 「は」の機能

次に「は」の場合であるが、「は」の２つの用法のうち、主題用法は、文脈指示あるいは総称指示の名詞句に付いて、「それについて述べる」ということを示す、という用法であった。これは、文脈との相関に基づいた定義である。

ここでは「は」の一次的機能は、この「主題」の機能、即ち、文脈中から何らかの要素を抜き出して示す、という機能であるとし、それによってもう一つの用法として説明されていた対照用法が、聴者の解釈の結果として導かれることを示そう。

「は」の機能を上のように考えた場合、「ａはＰだ」という発話に対して、聴者が対象 a' を抜き出せるような文脈（環境）を持っている場合には、その機能は単にその a' を抜き出した、ということによって果たされる。しかし、聴者がそのような文脈を持っていない場合には、適当な文脈を構成する必要性が生じる。

ここより先は、「が」の場合と同様であり、構成された文脈に基づいて、一般的な対照解釈が行なわれることになる。

以上の過程は次のように記述できよう。

1. 「は」の使用は、それが付随した名詞句が表す要素 a' を文脈から抜き出すという機能を聴者の解釈過程に対してもたらす。

2. 聴者に適当な文脈がある場合には、その文脈から抜き出されたということによって、「は」はその機能を果たし、解釈過程を停止してよい。（主題用法としての解釈）

3. しかし、抜き出すべき適当な文脈がない場合、その機能を完結させるために、そのような文脈を構成しようとする。その際に、抜き出されるべき a' と対照をなすような要素が（普通は）導入される。

4. 新たに構成された文脈に基づいて、一般的な対照解釈が行なわれる。（対照用法としての解釈）

「が」の場合と同様に、以上の過程は次のような図式でも表せよう。

$$
(28)\quad \begin{array}{cl}
utter\ P_1'(a_1') & ① \\
\hline
P_1'(a_1') & ② \\
\hline
C \vdash P_1', a_1, \ldots, a_m' & ③ \\
\hline
\neg P_1'(a_i') & ④
\end{array}
$$

これらは、

① ： 発話の観察

② ： 発話が呈示する情報の認識（「は」の使用による、それが抜き出す要素が文脈中にあるかどうかのチェック）

③ ： 要素を抜き出せる文脈の構成

④ ： 対照解釈

という過程を表すものである。

5 関連研究

川森 [4] は、次のような質問応答の文脈における、「が」の使用を分析することによって、「が」の総記解釈の形式化を試みている。

(29) 誰が賢いですか

(30) 太郎が賢い

そこでは、「a が P だ」における P に関する a の唯一性条件が取り上げられ、その条件が、質問に対する回答を定めるという対話の coherency に従って、abductive な推論によって求まるということが主張されている。これは、発話を解釈する際に、その時の文脈を参照して、なるべくそれらしい解釈を選ぶという、いわゆる最良解釈の手法を用いたものであり、それを基にした解釈手法は他にも数多く提案されている [2][8]。

しかし、ここで述べた総記解釈・対照解釈を導く形式は、これらとは重要な点で異なる。即ち、前者が対話の結束性・一貫性 (coherency) に基づいて、文脈と発話により呈示された情報から最も確からしい前提情報を選ぶという形式であるのに対して、後者は、Grice 流の会話原則に基づいて、文脈と発話により呈示された情報から、それと何らかの点で対照をなす情報を排除する、という形式であるという点において異なるのである。

さらにつけ加えるならば確かに上のような文脈で、(30) が (29) の回答になるためには唯一性条件が必要になるが、それは一般的な質問応答の文脈において常に言えることであって、「が」を用いたこととは直接の関係はない。即ち、次のような質問応答においても、やはり唯一性条件は必要になる。

(31) 何を飲みたいですか

(32) お茶を飲みたい

また、白井 [11] は、久野の分析を受けて、「が」によって結ばれる名詞句と述語との意味論的な分析を行なうことにより、主語が「が」でマークされる文が叙述の解釈を受けるためには、その述部は Carlson の言う 'stage' に働く意味的性質を備えていなければならないとしている。これは、久野による

> 叙述の「が」は、「動作・存在・一時的状態」の述語をとる

という分析の、意味論上での形式化の試みである。

それぞれの語の意味内容は、当然それらを用いた発話の解釈に影響を及ぼす。言葉を現実世界との連関において使用しているのであれば、当然その世界の構造に対する認識が言葉の解釈にも制限を加える。そのような観点から考えると、上の事実に対しては、次のような説明も可能である。

動作・存在・一時的状態についての言明は、全てある関係の一時的成立を述べるものであって、その意味では一回限りの事象に関する言明である。従って、そのような言明の呈示する情報 $P(\vec{a})$ は、ある意味で排他的である。つまり、その動作を行ったのは、その時はまさしくその主体者 a_1 だけであり、その動作が行われた相手は、まさしくその時の相手 a_2 だけなのである。そのような情報は、その内容自身に $\neg P(b_1, a_2, \ldots) \wedge \neg P(a_1, b_2, \ldots)$ といった情報（総記解釈により導かれるような情報）をある意味で含むと言えよう。そして、これはあらゆる $\vec{b}$ について言える。従って、わざわざ対照的な $\vec{b}$ を選んで総記解釈を行う必要もないため、いわゆる「叙述」という解釈に落ちつくことになる。

それに対して、習慣的動作や、恒常的状態についての言明が呈示する情報 $Q(\vec{b})$ は、そのような排他的な要素をその内容自身には含まない。従って、その情報を構成する構成素と何らかの意味で対照をなす要素に対する平行した情報を排除する、という「総記」解釈が行なわれることになる。

いずれにせよ、このような意味論的な分析は、我々の分析とは独立である。そして、上の分析は、ある発話を構成する名詞と述語の意味的関係についての分析であって、「が」「は」の使用には関係しない。むしろ、このことは、

総記解釈・対照解釈が「が」「は」の使用からは独立であるということを、意味的な観点から支持するものであると言える。

6 結論

本稿では、用法とは言語表現の使用が持つものではなく、聴者の解釈過程が説明するものである、という基本方針に従って、従来「が」「は」の持つ用法として説明されてきた総記用法・対照用法を、それらの語彙の持つ一次的な語用論的機能と、聴者の一般的な解釈過程の特徴とによって整理し直して説明した。

我々の採用した仮設は、「が」「は」の一次的な語用論的機能は、それぞれ、その発話文脈に対して新情報をマークする、発話文脈からある要素を抜き出して示す、ということであり、その後の総記解釈・対照解釈は、特殊化された会話の含意を導く、聴者の、ある一般的な解釈過程（Grice の量の公準に基づく）によってもたらされるということであった。そして本稿では、この仮設により、久野の言う「が」「は」の用法・機能の再構成が可能になることを説明した。

ただ、以上の仮設は、未だに直観に基づくものであり、その妥当性の検証は今後の課題である。また、ここでは「新情報のマーク」「文脈からの抜き出し」ということを一次的機能として取り上げたが、この部分については、例題に当たった、更に詳細な分析が必要であると思われる。これも今後の課題である。

いずれにせよ、言葉の用法としてまとめられていた一分野を、言語の持つ語用論的機能と、聴者の解釈過程の範型とに分離して分析するということによって、より有効な理論が構築できる。本稿は、そのような立場からの、一試案である。

謝辞

尚、本研究は第5世代コンピュータプロジェクトの一環として、（財）新世代コンピュータ技術開発機構からの受託（発注番号 S5303 号）により行なったものである。

参考文献

[1] Grice,P.H.: *Logic and Conversation*, in P.Cole and J.L.Morgan(eds.), *Syntax and Semantics, Vol.3: Speech Acts*, Academic Press, pp.41-58, 1975.

[2] Hobbs, J.R., Stickel,M., Martin, P. and Edwards, D.: *Interpretation as Abduction*, Proceedings of the 26th Anual Meeting of the ACL, pp.95-103, 1988.

[3] 池田 尚志: 助詞「が」の働きについて, 電子情報通信学会論文誌, Vol.J72-D-II, No.11, pp.1904-1909, 1989.

[4] 川森 雅仁: 総記列挙の「が」の形式化について, 電子情報通信学会研究報告, NLC89-42, pp. 21-26, 1989.

[5] 久野 すすむ: 「日本文法研究」, 大修館書店, 1973.

[6] 久野 すすむ: 機能的構文分析のすすめ, 月刊言語, 大修館書店, Vol.19, No.4, pp.32-43, 1990.

[7] Levinson, S.C. : *On the Notion of a Generalized Conversational Implicature*, informal manuscript, 1989.

[8] 長尾 確: 多義性を含む文の解釈のモデル, 談話理解モデルとその応用シンポジウム論文集, pp.33-40, 1989.

[9] 野口 直彦, 鈴木 浩之: 名詞（句）発声にできないこと＝指示, NLU+PSG 合同ワークショップ論文集, ICOT-TR, 1990.

[10] 白井 賢一郎: 「前提」と会話の含意の定式化について, 対話行動の認知科学的研究論文集, 「対話行動の認知科学的研究」研究会, pp.39-58, 1984.

[11] 白井 賢一郎: 「形式意味論入門」, 産業図書, 1985.

[12] 山梨 正明: 「発話行為」, 新英文法選書, 大修館書店, 1986.